

群馬県前橋市

亀里銭面Ⅱ遺跡

産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序 文

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代よりの豊かな文化あふれる地であり、東国の奈良と称されています。今から2万8千年前の旧石器を始めとして、10基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの近代化を示す昭和府舎等の近代化遺産など多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内のはば全域に残されています。古代の人々の暮らした家の跡、使った石器や土器などの道具や、水田跡なども多く、毎年の埋蔵文化財発掘調査により多くの新しい発見があります。

本年度産業振興支援施設造成に関連して調査を行った亀里町周辺は、前橋市南部の水田地帯にありますが、近年の調査で周辺から縄文時代から中世に至る人々の生活の跡が多く発見されています。

亀里鉢面Ⅱ遺跡では、平安時代の水田跡など多くの遺構を検出し、地区の歴史解明に貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました前橋市土地開発公社、地元関係者、酷寒・強風のなか調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成13年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 阿部 明雄

例 言

1. 本書は産業振興支援施設造成に伴う亀里鉄面II遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 阿部明雄）が前橋市土地開発公社から受託したもので、再委託を受けた山武考古学研究所が前橋市教育委員会の指導のもとに実施した。
3. 遺跡の所在地・調査面積・調査期間並びに担当調査員は次の通りである。

所 在 地 群馬県前橋市亀里町874番地外

調査面積 約1,282m²

調査期間 平成12年11月21日～平成13年3月16日

調 査 員 大越直樹・千葉孝之（山武考古学研究所）

4. 本書の執筆は、第1章を前橋市教育委員会の眞塩明男が、第2～5章を大越が執筆し編集した。
5. 調査に際しては下記の諸機関にご指導・ご協力を頂いた。
前橋市教育委員会 勘定馬県埋蔵文化財調査事業団 勘東日本重機（前J・T空撮
(社)新成田総合社 開成測量㈱
6. 遺跡の出土遺物・写真・図面等の資料は、前橋市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 採図中に使用した方位は座標北である。
2. 採図第1図には建設省国土地理院発行2万5千分の1地形図「前橋」・「高峰」、第2図には明治21年陸地測量部発行2万分の1地方迅速図「倉賀野辺」、第3図には前橋市都市計画課発行の2千5百分の1現地形図「75」を使用した。
3. 本書では次のように表示した。
亀里鉄面II遺跡-12G49 土坑-D 溝-W 浅間A軽石-As-A 浅間B軽石-As-B
浅間C軽石-As-C 棚名ニツ岳渋川テフラーFA
4. 掲載したスクリーントーンは以下を示す



…As-B



…FA



…地山

目 次

序文

例言・凡例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の方法と経過	3
第4章 検出された遺構と遺物	5
第5章 まとめ	9
抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	2
第2図 遺跡の位置	2
第3図 調査範囲とグリッド設定図	3
第4図 基本土層	4
第5図 遺構全体図（1）	6
第6図 1号さく状遺構	7
第7図 11・12・13号溝	8
第8図 遺構全体図（2）	10
第9図 水田跡畦畔と水口	11
第10図 水田跡の凹凸面	12
第11図 1・2・3・4号土坑	12
第12図 1・2・3・4号溝	13
第13図 出土遺物	14

表 目 次

表1 周辺遺跡	1
表2 遺構一覧表	14

図版目次

図版1 遺跡周辺、遺跡遠望	
図版2 調査区北側(1)、調査区東側(1)、1号さく状遺構、調査区北側(2)	
図版3 調査区東側(2)、2・3・4号土坑付近、2・3・4・5号畦畔、7号畦畔付近の水口	
図版4 9号畦畔付近の水口、水田跡の凹凸、1号土坑、出土遺物	

第1章 調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成12年11月から平成13年3月にかけて行われた。

平成12年10月13日付けで前橋市土地開発公社 理事長 都木一年より前橋市教育委員会に産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出された。これを受け平成12年11月15日に前橋市土地開発公社と前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で委託契約を締結した。また、同年11月21日に当調査団と山武考古学研究所との間で発掘調査・整理作業の実務についての再委託契約を締結し、現地での発掘調査を開始した。遺跡名称は『亀里鉄面II遺跡』とし、遺跡略称は『12G49』とした。なお、『亀里』は現在の町名を『鉄面』は旧地籍の小字名を採用している。

第2章 遺跡の位置と環境

亀里鉄面II遺跡は群馬県前橋市亀里町874番地外に所在し、JR前橋駅より南方向に約5.4km、利根川左岸の前橋台地上に位置する。隣接する遺跡としては市道を挟んで南側に亀里鉄面遺跡(2)が所在する。周辺地区では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺跡の存在が確認されている。

縄文時代では、遺構の伴う横手早稻田遺跡(10)、土器を出土している徳丸仲田遺跡(21)、横手湯田V遺跡(14)などがある。

弥生時代には、後期集落跡の櫛島川端遺跡の所在が確認されている。

古墳時代には、集落跡、水田跡、墓(方形周溝墓・古墳)などの遺跡が確認されている。特に水田遺跡は、西横手遺跡群(9)や、横手湯田遺跡(15)で確認され、時期は前・中・後期にわたって耕作されていることが判明している。

奈良・平安時代には条里制に基づく水田開発が進む。条里的な区割りは平安末期にも続くが、浅間山の噴火によるテフラ(As-B)で埋没し、本遺跡でも水田跡が検出された。

近世では、1783年(天明3年)に浅間山が噴火し、テフラ(As-A)が降下した。被災後の耕地復旧は、テフラを除去し坑に埋めた痕跡が本遺跡でも確認されている。

表1 周辺遺跡

No.	遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代			奈良・平安時代			中・近世			備考
				集落	水田	その他	水田	その他	城館	水田	その他	城館	
1	亀里鉄面II遺跡		遺物出土					○					
2	亀里鉄面遺跡		遺物出土					○					
3	堀内町内遺跡									○			
4	川前遺跡			○									
5	家田遺跡			○									
6	宮代中田遺跡												
7	公家東遺跡	○	C風		C風島	古墳	○	○		○	集落		
8	浅間神社古墳												
9	西横手遺跡群	○	C下-C風		○						墓状		
10	横手早稻田遺跡	○		○	○	田河遺跡	○	○		土坑・溝	水田	側面石製品	
11	徳丸井戸高遺跡	○		○	○	土坑・溝	○	○			○	水田・墓	
12	亀里平阪遺跡			○							○	水田	
13	横手平坂遺跡				FP	遺跡							
14	横手湯田V遺跡		遺物出土		○	○							
15	横手湯田遺跡	○	○	○	○	As-C下溝	○	○	○	土坑	水田	徳丸仲田	
16	横手湯田Ⅱ遺跡		遺物出土		○							土坑・溝	
17	越化寺跡引込跡									土坑・溝			
18	西山Ⅲ遺跡						溝	○	○		井戸・溝		
19	西山Ⅳ遺跡			○	○						溝		
20	西山Ⅴ遺跡		包装層										
21	西山Ⅵ遺跡		包装層	○	C風	○				墓・井戸	墓・溝	新規複文土器	
22	徳丸仲田Ⅰ遺跡			○			土坑・溝	○	○				
23	鶴見川根御塚Ⅱ遺跡												
24	徳丸高塚Ⅲ遺跡										土坑・溝		



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡



- 1 亀里鉄面Ⅰ遺跡
- 2 亀里鉄面遺跡

第2図 遺跡の位置

第3章 調査の方法と経過

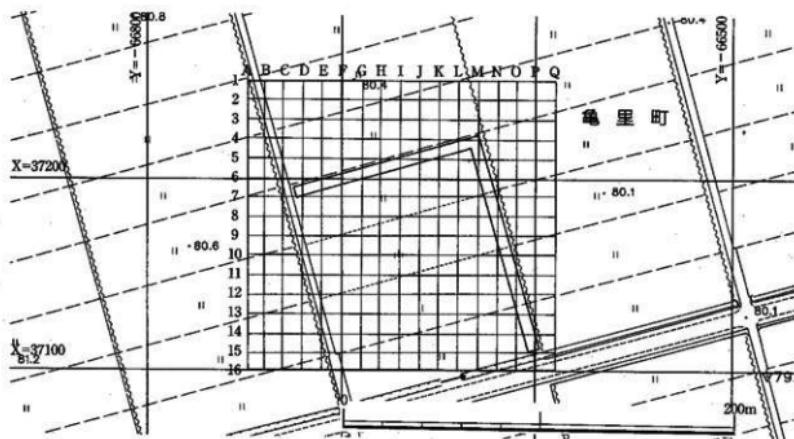
第1節 調査方法

調査区内に10×10mの方眼網を被せ、これを基準とすることにした。方眼網の基点は、国家公共座標標IX系 X=37,250、Y=-66,750とし、東に向かってアルファベット大文字を A から、南に向かってアラビア数字を 1 から付していくことにした。

図面の縮尺は1/20、1/40、1/100を基本とした。

写真撮影は、35mm（白黒・カラーリバーサル）を使用し、遺跡の全体写真は航空撮影を行った。

遺物の取り扱いについては、すべて水洗・注記を行ない、報告書に掲載する遺物に関しては、図化することにした。



第3図 調査範囲とグリッド設定図 (S=1/2,500)

第2節 調査経過

（平成12年11月21日～平成13年3月16日）

平成12年

11月 下旬 発掘に先立って現況写真を撮影する。
施設の設置・器材の搬入を行ない、調査範囲の設定後、重機により表土除去作業を開始する。

12月 上旬 表土除去作業を終了し、人力による平成時代後期水田跡の掘り下げ作業を開始する。

中旬 平成時代水田跡の調査終了後、空撮、遺構全体図作製を行う。FA層面まで重機で掘削作業を行う。同層の堆積が希薄で範囲が極めて狭い範囲に限定されること

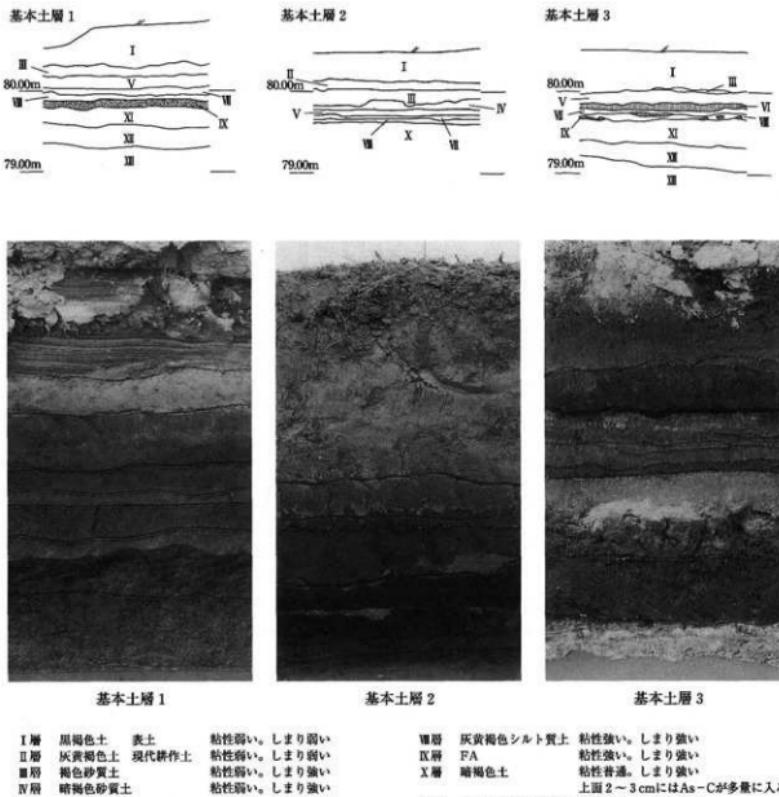
が判った。このため状況撮影を行い、As-Cが混入する土層の下面まで、重機で掘削することにした。

下旬 同層までの人力による遺構確認・掘り下げを行い、さく状遺構などを検出する。空撮・遺構全体図作製後、トレンチを掘り下げ、下面から遺構・遺物が存在しないことを確認する。施設・器材を撤去・搬出し現地における調査を終了した。

平成13年
1～3月 整理作業を行う。

第3節 基本土層

当初、遺構の検出を予想した3つの鍵層は、V層（As-B）、IX層（FA）、それにAs-Cを混入する土層で、そのうち遺構を確認したのは、IX層を除く上下2層の下面であった。As-C混土層は遺跡全体に広がっていたが、X層の表面に厚さ3cm未満で薄く堆積していた。



第4図 基本土層

第4章 検出された遺構と遺物

調査では遺構確認面を2面検出した。As-C混土層下面と、As-B下面である。前者からは主にさく状遺構が、後者からは水田跡が検出された。この他奈良・平安～近世に至る遺構として土坑4基、溝11条が確認された。また遺物については本書に記した縄文時代の石器のほかに、古墳時代前期～近世までの遺物が整理箱1箱分出土している。

第1節 奈良・平安時代

(1) 1号さく状遺構（第6図／図版2）

遺跡から検出されたさく状遺構は1面のみで、As-C混土層下で検出された。調査区の北西側H-5に位置し、北端は調査区外となっており、他の遺構との重複はない。長軸が6.60m、短軸が1.35～2.70m、深さは6～8cm、小溝が広がる面積は77.34m²である。歓山のような盛り上がりは認めらなかつた。小溝間の幅は5～30cm、方位はN-80～90°-Eで、底面は起伏が著しい。埋没土は、シルト質の灰褐色土で、第Ⅲ層にきわめて類似しており、調査区北壁で両者を比較してみたが、遺構の掘り込みは不明瞭であった。

遺物は出土していない。

(2) 11～13号溝（第7図／表2／図版2）

いずれも、1号さく状遺構同様にX（暗褐色土）～XI（にぶい黄褐色土）層上面から検出された。

11・12号溝の覆土は暗褐色土で、X層に類似しており、同層から掘り込まれているようであるが、立ち上がりは不明瞭である。南北に走向する11号溝の南端は、東西に走向する12号溝の西端付近でT字状につながった状態で検出されたが、両者の覆土に差異はなく、同時期の遺構である可能性が高い。

13号溝の第X層下から検出されている覆土は、シルト質の暗褐色土である。

溝内から遺物は出土しなかつた。

(3) 平安時代後期水田跡（第8・9図／表2／図版2～4）

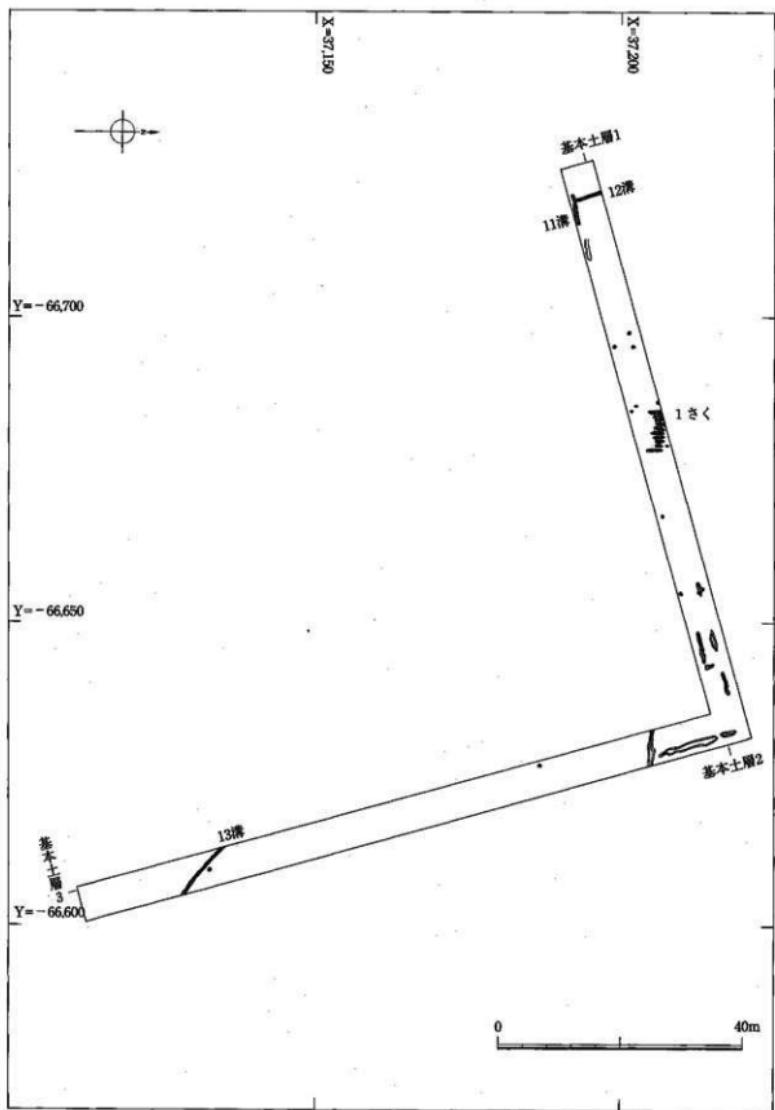
水田跡は、As-Bに埋没して検出された。同層は調査範囲のはば全域を覆っているが、北西に向かうほど残りは悪くなる。調査範囲の標高は調査区北西端で80.00m、L字に南東へ折れ曲がる北東角で79.80m、南東端で79.57mとなっており、南北間の距離は100mほどあるが、水田面の比高差は0.23～0.47mと、南に向かって緩やかに傾斜していくようである。

水田面に伴う水路跡は、5～7・10号溝の4条で、南北に走向する5・6号溝と、東西に走向する4・10号溝がある。地形から流路は、前者が北から南へ、後者が西から東へ進むようである。

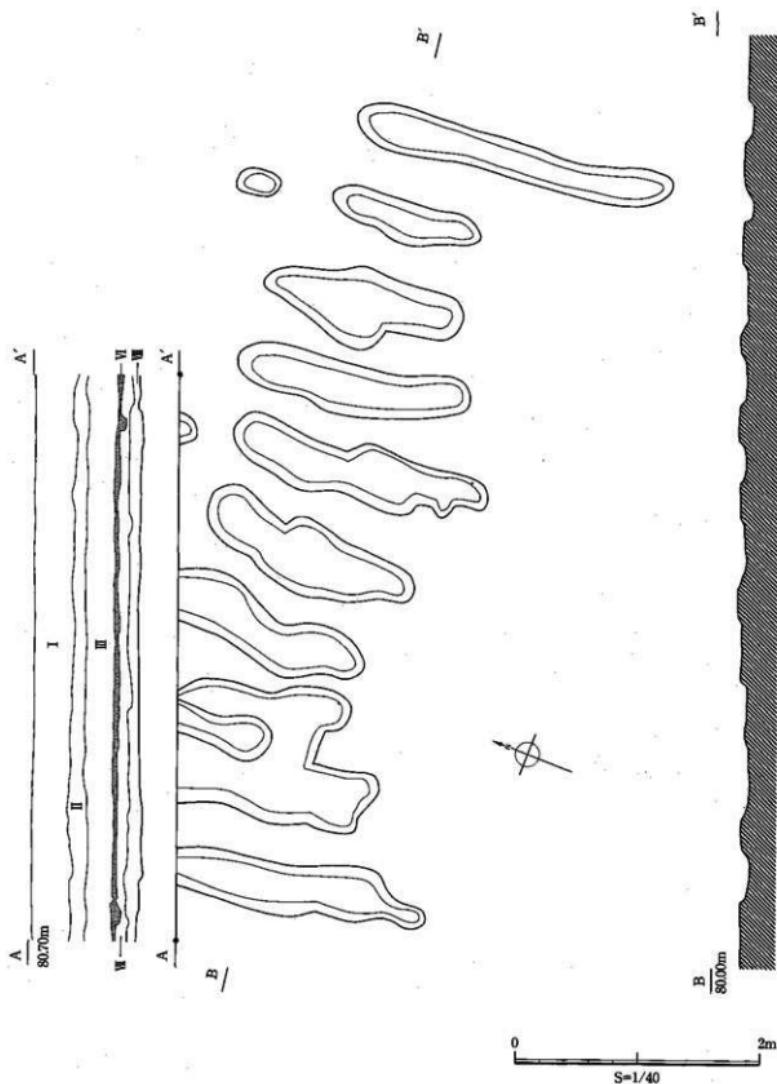
畦畔は26条検出された。南北に走向する畦畔のうち、方位N-88°-W-N-0°-Wが比較的多い。6号溝を挟んで対になり南北に走向する3・4号畦畔、幅が広く南北に走向する5号畦畔、5号溝を挟んで対になり東西に走向する17・18号畦畔、その延長にある16号畦畔、これらはいずれも調査範囲の北側で検出された。形状から大畦畔の可能性が考えられる。

水口は3個所あり、いずれも調査区東側で検出された。

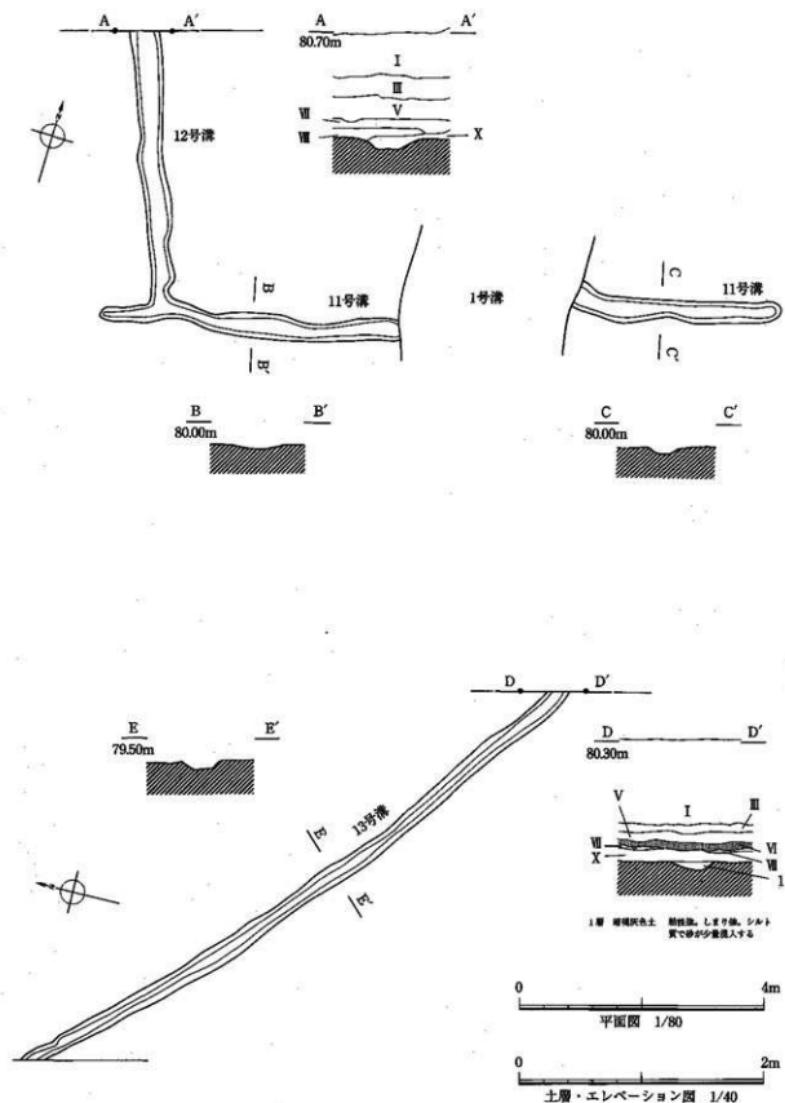
水田面の凹みの形状は、明瞭ではないがいずれも内部にAs-B軽石が混入していた。凹みには15cm前後の円形で比較的走向をたどるものと、長軸20cm以上の長楕円形や不定形のものがあり、深さは両者とも



第5図 造構全体図(1) (S=1/800)



第6図 1号さく状造構



第7図 11・12・13号溝

2~5 cm で、形状から、前者については馬の蹄跡と推定される。

遺物は土師器小片が3点出土している。

第2節 中・近世（第11・12図／表2／図版3・4）

土坑4基、溝4条が検出された。

1号土坑は4号溝を掘りこんでいて内部にAs-Aが大量に混入している。2~4号土坑・1~4号溝はAs-B軽石面を掘り込んでいる。各土坑は長径0.75~2.35mで、深さは8~15cmあり、平面形状は円形・楕円形などであった。

1~4号溝は、調査区北側西寄りにまとまり、いずれの流路も調査範囲内を北から南へ向かっている。幅0.34~2.70mで、深さは2~47cmである。

遺物は、1号溝からのみ検出されており、備前系陶器や墨絵染め付けのある白磁など、中~近世の陶磁器片12点であった。

第3節 遺構外出土遺物（第13図／図版4）

遺物は石築が1点である。チャート製の四基無茎築で、裏面の調整は、基部を2回に分けて行った後、右側縁部を再調整している。

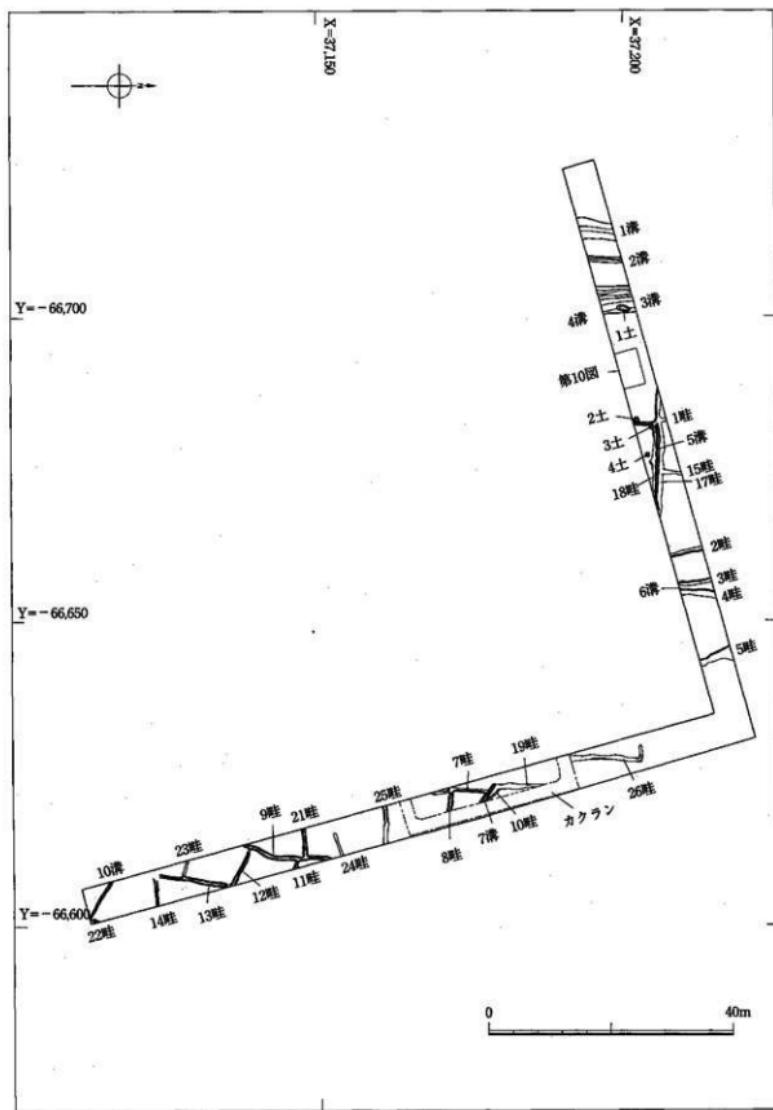
その他古墳時代前期に伴うものと思われる土師器小片が2点、奈良・平安時代と思われる須恵器片が1点、近世陶磁器片が6点、時期不明の土師器片が2点出土している。

第5章 まとめ

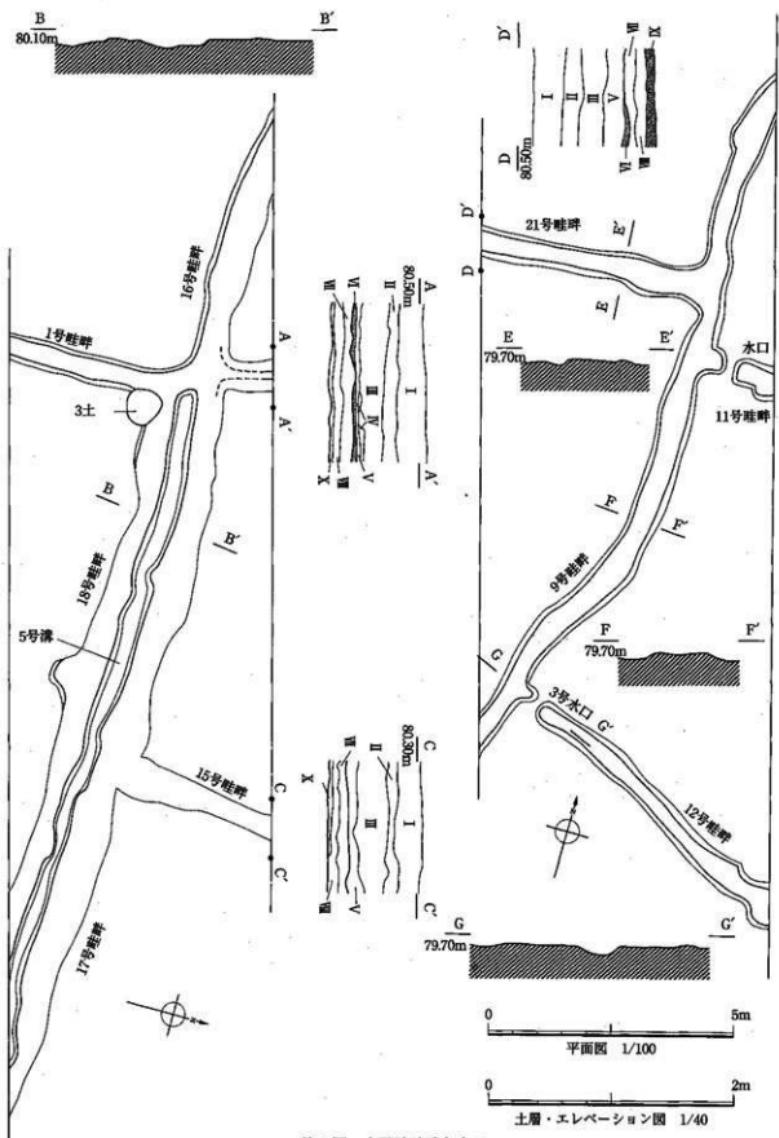
奈良・平安時代のAs-B以前の耕作と思われるさく状遺構は、畠跡や畝状遺構として周辺遺跡でも報告されている。さく状遺構は帯状に長い分布範囲をもつ傾向がある。調査範囲が極めて狭小ながら、このことは本遺跡にもあてはまるようである。

遺跡の主体を占める平安時代後期水田跡の形状と田積は、調査範囲が狭小なため全貌は明らかではないが、調査区北側東寄り付近と東側南寄り付近の水田区画（1・7・9・11~13・15・16号畦畔に挟まれた部分）が比較的遺存状態が良い。東西8m、南北6~8mの方形もしくは長方形の区画で、田積は50m²前後だったことが判明する。また第4章第1節でも述べたように、調査範囲内の畦畔の南北走向はN-0°主体で、周辺で検出された水田畦畔の走向とほぼ同様の傾向をみせている。

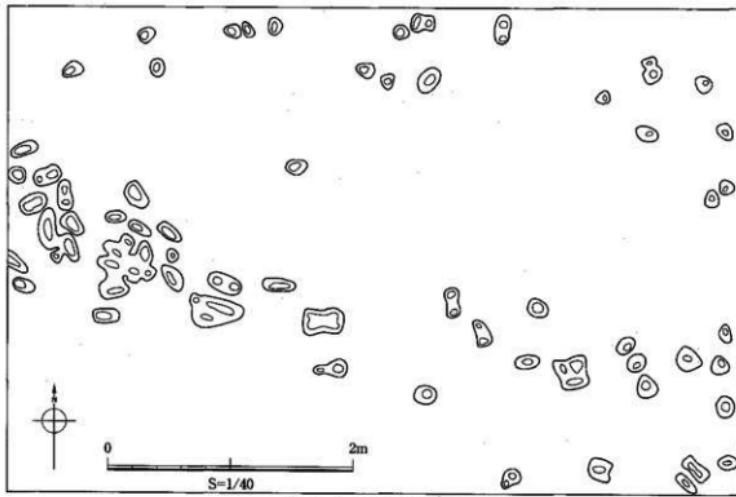
以上のことから現在、横手・亀里・新堀・鶴光路などの集落が営まれる微高地に囲まれた低地に立地する本遺跡では、平安時代後期においては水田が営まれていたが、それ以前は畠とも推定されるさく状遺構の状態であったことが判明した。



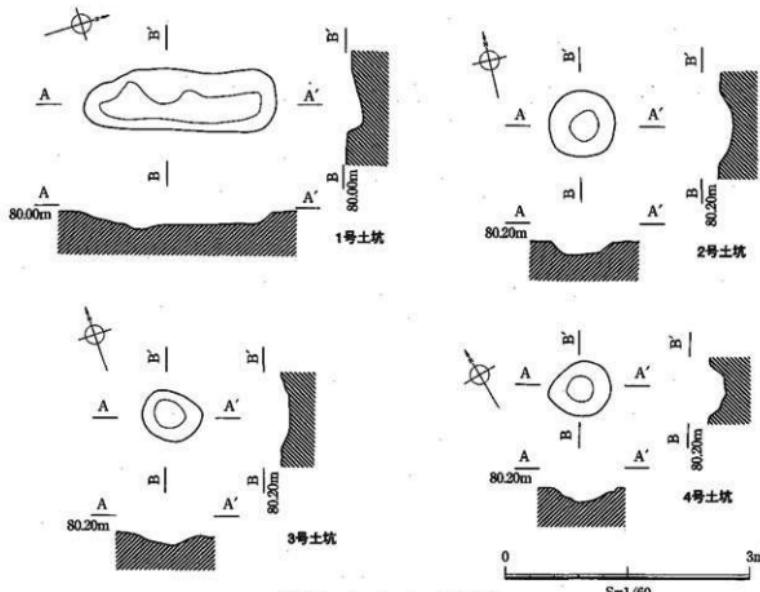
第8図 造構全体図(2) (S=1/800)



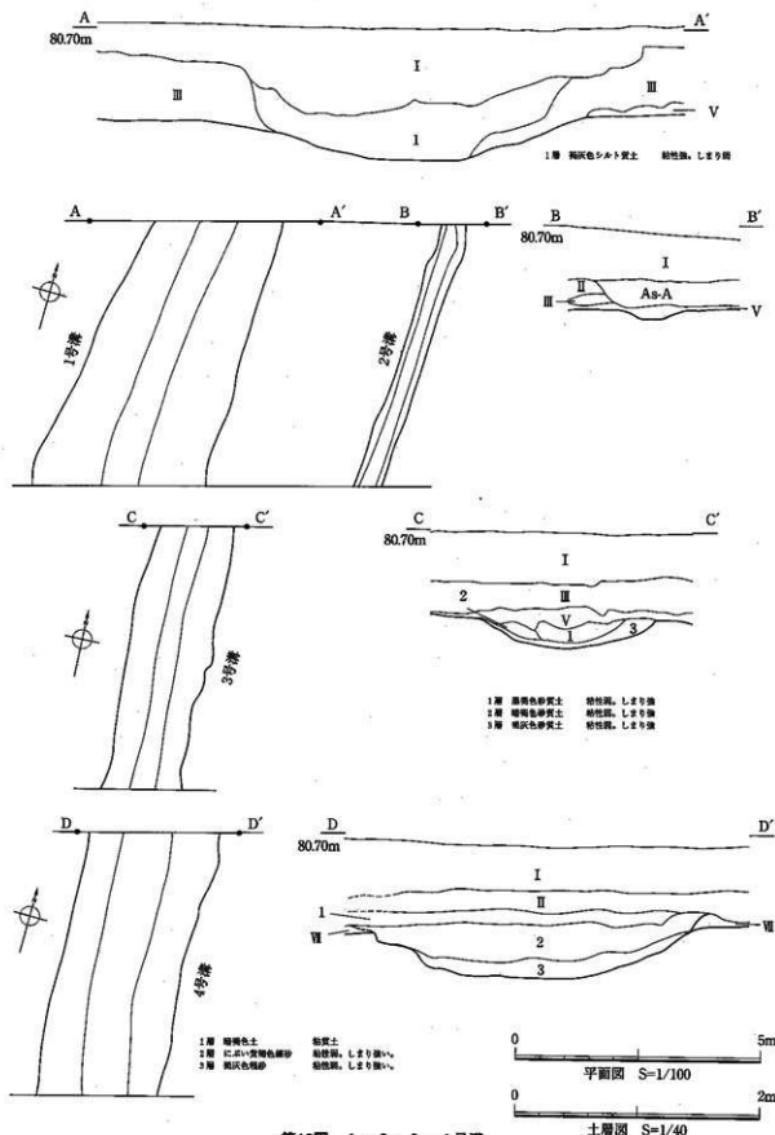
第9図 水田畦畔と水口



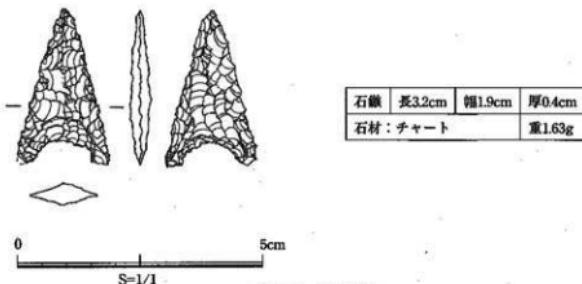
第10図 水田跡の凹凸面



第11図 1・2・3・4号土坑



第12図 1・2・3・4号溝



第13図 出土遺物

表2 造構一覧表

畦畔

番号	上幅 m	下幅 m	高さ m	走向方位
1号畦畔	0.40	0.60	0.05	N-0°
2号畦畔	—	0.80	0.06	N-14°
3号畦畔	—	0.70	0.03	N-5°-W
4号畦畔	—	1.15	0.04	N-6°-E
5号畦畔	—	2.80	0.04	N-28°-W
6号畦畔	—	0.90	0.03	N-0°
7号畦畔	—	0.55	0.02	N-0°
8号畦畔	0.55	0.80	0.04	N-86°-W
9号畦畔	0.65	0.80	0.09	N-10°-E
10号畦畔	0.70	0.90	0.06	N-55°-W
11号畦畔	0.52	0.72	0.04	N-85°-W
12号畦畔	0.52	0.70	0.09	N-65°-W
13号畦畔	0.50	0.60	0.07	N-10°-E

番号	上幅 m	下幅 m	高さ m	走向方位
14号畦畔	0.33	0.58	0.04	N-85°-E
15号畦畔	0.38	0.58	0.04	N-0°
16号畦畔	—	0.25	0.03	N-88°-W
17号畦畔	—	0.94	0.02	N-88°-W
18号畦畔	—	1.10	0.05	N-88°-W
19号畦畔	—	1.00	0.03	N-0°
20号畦畔	0.35	0.40	0.04	N-55°-W
21号畦畔	0.60	0.78	0.05	N-86°-E
22号畦畔	0.30	0.40	0.04	N-24°-E
23号畦畔	—	0.40	0.03	N-75°-W
24号畦畔	—	0.50	0.03	N-71°-E
25号畦畔	0.42	0.62	0.05	N-89°-E
26号畦畔	—	0.50	0.02	N-0°

土坑

番号	位置	形 状	規 模 m			備 考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	F 6	椭円形	2.35	0.54	0.14	4号溝を切る。As-Aを大量に混入
2号土坑	H 5	円形	0.85	0.78	0.15	水田面を切る。As-Bを大量に混入
3号土坑	H 5	椭円形	0.75	0.57	0.08	水田面を切る。As-Bを大量に混入
4号土坑	I 5	円形	0.75	0.65	0.14	水田面を切る。As-Bを大量に混入

溝

造構名	位置	方 位	上幅 m	下幅 m	深さ m	備 考
1号溝	E 6	N-0°	3.40	0.78	0.36	水田面を切る。陶磁器片12
2号溝	F 6	N-0°	0.58	0.26	0.02	水田面を切る
3号溝	F 6	N-0°	1.72	0.36	0.31	水田面を切る
4号溝	F 6	N-0°	2.70	1.04	0.47	水田面を切る
5号溝	I 5	N-88°-W	0.52	0.32	0.05	水田に伴う
6号溝	K 4	N-0°	1.62	1.52	0.10	水田に伴う
7号溝	N 8	N-55°-W	0.50	0.34	0.02	水田に伴う
欠番	—	—	—	—	—	—
10号溝	P14	N-60°-W	0.44	0.26	0.03	水田に伴う
11号溝	E 6	N-74°-E	0.42	0.27	0.02	As-C下。12号溝との新旧不明
12号溝	E 6	N-0°	0.48	0.30	0.04	As-C下。11号溝との新旧不明
13号溝	P12	N-50°-W	0.32	0.10	0.07	As-C下

亀里銭面 II 遺跡

図版一

遺跡全景



遺跡周辺

矢印は遺跡位置を示す



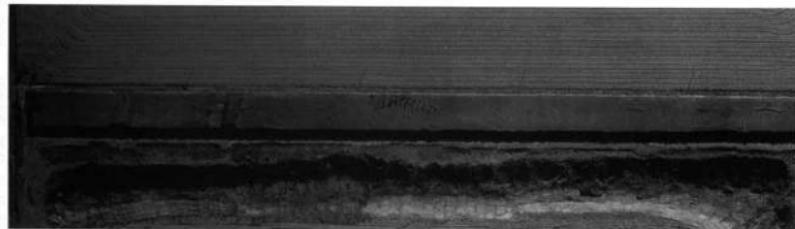
遺跡遠望（北から）

龜里銭面Ⅱ遺跡

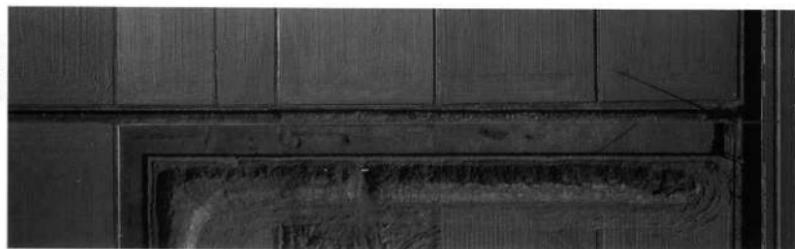
図版2

遺構（北・東側全景）

さく状遺構



調査区北側(1)



調査区東側(1)



1号さく状遺構



調査区北側(2)

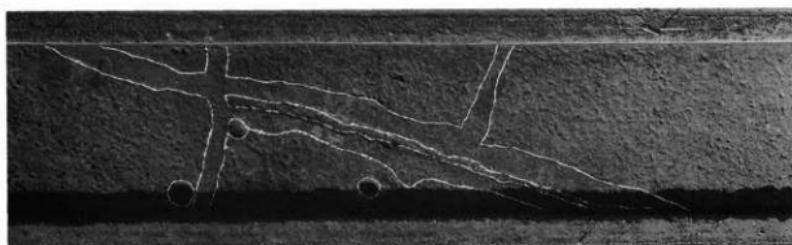
龜里鐵面 II 造跡

図版 3

遺構（東側全景・土坑・水田）



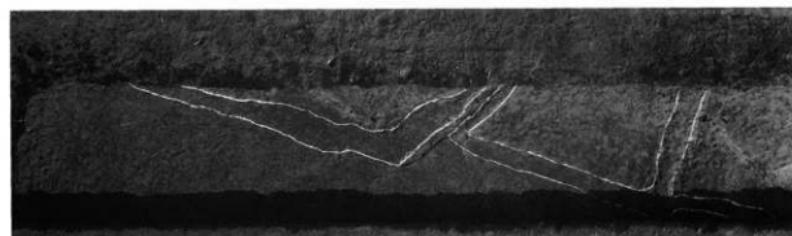
調査区東側(2)



2・3・4号土坑付近



2・3・4・5号畦畔

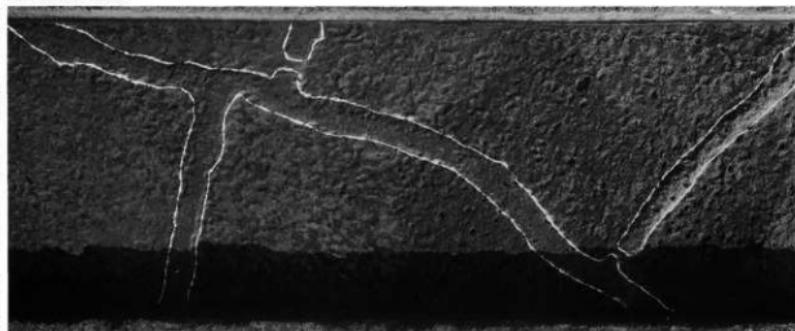


7号畦畔付近の水口

龜里鉄面Ⅱ遺跡

図版4

遺構（水田・土坑）・出土遺物



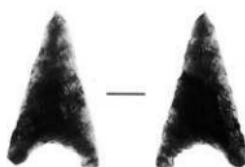
9号畦畔付近の水口



水田跡の凹凸（上が北）



1号土坑（北から）



出土遺物

抄 錄

フリガナ	カメサトゼニメンIIイセキ						
書名	亀里銭面II遺跡						
副書名	産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	大越直樹・眞塩明男						
編集機関	山武考古学研究所 / 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 TEL 0476-24-0536(代)						
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 / 〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4						
発行年月日	西暦2001年3月23日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
亀里銭面II	群馬県前橋市亀里町 874番地外	市町村 10201	遺跡番号 12G49	36°19'57"	139°05'30"	20001121 ~ 20010316	1,282m ² 産業振興支援 施設造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
亀里銭面II	水田跡 他	绳文時代 奈良・平安時代 中・近世	さく状遺構・水田跡 土坑4・溝11	石器 土器・須恵器 陶磁器	As-B 軽石下水田跡

出土遺物及び図面等の取り扱いについて

項目	内 容	
水洗い	<ul style="list-style-type: none"> 全点実施。 	
注記	<ul style="list-style-type: none"> 遺跡略称(12G-49)、出土遺構(D:土坑、W:溝) 土器細片については同様の内容を収納したビニール袋に明記した。 	
実測	<ul style="list-style-type: none"> 遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。 	
台帳	<ul style="list-style-type: none"> 遺物台帳・図面台帳・写真台帳があり、それぞれの資料の検索が可能であるよう作成した。 	
保管方法	出土遺物	<ul style="list-style-type: none"> 出土遺物は、報告書掲載と未掲載に分け、コンテナに収納した。
	図面	<ul style="list-style-type: none"> 遺構実測図と遺物実測図に分け、それぞれ図面ケースに収納した。
	写真	<ul style="list-style-type: none"> 遺構写真は、モノクロ35mm、カラーリバーサル35mm、カラーネガ35mm、モノクロ6×6cm(空撮写真)の4種類がある。 遺物写真は、報告書掲載分についてのみモノクロ6×7cmフィルムを使用し、撮影を行った。

亀里銭面II遺跡

印刷 平成13年3月16日

発行 平成13年3月23日

編集 山武考古学研究所 〒0476-24-0536
発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷 (株)文化総合企画 〒0476-93-0593